CORE Metadata, citation and similar papers at core.ac.uk

アートプロジェクトによる地域創生 ―ローカルコラボレーターの醸成―

「沙弥島アートプロジェクト」の実践を通して

COMMUNITY DESIGN WITH LOCAL COLLABORATOR BY ART PROJECTS

Shamijima Art Project by Kobe Design University

藤山　哲朗	芸術工学部環境デザイン学科　教授
戸矢崎　満雄	芸術工学部アート・クラフト学科　教授
かわい　ひろゆき	芸術工学部ビジュアルデザイン学科　教授
さくま　はな	芸術工学部アート・クラフト学科　助教
中山　玲佳	芸術工学部アート・クラフト学科　助教

Tetsuro FUJIYAMA	Department of Environmental Design, School of Arts and Design, Professor
Mitsuo TOYAZAKI	Department of Arts and Crafts, School of Arts and Design, Professor
Hiroyuki KAWAI	Department of Visual Design, School of Arts and Design, Professor
Hana SAKUMA	Department of Arts and Crafts, School of Arts and Design, Assistant Professor
Reika NAKAYAMA	Department of Arts and Crafts, School of Arts and Design, Assistant Professor

要旨

近年、アートプロジェクトを媒介とした地域活性化が盛んである。本学研究グループでも 2013 年 3 月から開催された「瀬戸内国際芸術祭 2013」以来、「沙弥島アートプロジェクト」として香川県坂出市を対象地として活動してきている。2016 年度の共同研究では 2016 年 4 月の芸術祭春会期後半の運営と 11 月の展覧会を実行したが、本紀要で報告するのは後半の秋期展覧会「Memory of Shamijima～To See the Next～」を主対象としている。

今回の研究で特に考察しているのはアートイベントに関わる地域の協力者：コラボレーターの存在である。アートイベントが真の意味で地域の活性化に寄与するためには、地域の自発的な活動が必須と考えられるからである。そこでこれまでの継続的な活動で築かれた人脈を分類し、ワークショップ参加者、一般ボランティア、市役所スタッフ、地域の作家や研究者の地域住民とアートイベントの関わりについて論じている。

Summary

As Shamijima Art Project, our KDU members participated in Setouchi Triennale and some relative art events such as field work, workshops and exhibitions. In 2016, we executed “Tree Shades of Red” exhibition in Setouchi Triennale spring term and “Memory of Shamijima～To See the Next～” in autumn.

The issue of this paper is “Local Collaborators concerned in Art Projects”. They are necessary to make independent local art project. We assort collaborators into follows; 1. Artist(our team), 2.Workshop participators, 3.Voluntary citizen, 4.Student staff of KDU, 5. Setouchi Triennale staff, 6. Sakaid City staff, 7.Artist or Researcher in Kagawa, and 8.Visitors. Then we particularly mention in 2, 3, 6and7 as local collaborators and argue the quality and process of co-creative art work.

1. 研究の背景

本研究はこれまで継続的に取り組んできている「沙弥島アートプロジェクト」の一環である。過去の成果については本紀要においても2013年から報告しているので、詳細は割愛するが、研究の中心になっているのは瀬戸内国際芸術祭の一環として開催されているアートプロジェクトである。

初めに「沙弥島アートプロジェクト」を成立させている運営上の特色について整理したい。本学、神戸芸術工科大学の研究グループが実行している「沙弥島アートプロジェクト」であるが、年度・時期により主催者が異なる。

まず3年に1度のトリエンナーレ、瀬戸内国際芸術祭としての参加は、芸術祭実行委員会総合ディレクター:北川フラム氏を中心に、香川県等自治体、公益財団法人福武財団の力添えを受けている。この本開催では我々も第一義に作家として出展作品を制作することが求められ、アートプロジェクト全体のテーマと個々の作品のクオリティについても北川ディレクターと確認しながら進めている。

次に芸術祭開催年でも沙弥島会場の会期は春期のみであるため、全会期が終了する秋のクロージングに合わせて沙弥島でも関連イベントを行っている。また非開催年でも、地域に継続的にアートに関する興味を持ってもらうことと、次回の芸術祭の準備を兼ねたアートイベントを行ってきた。後者の二つに関しては本学グループと坂出市とが協力して実行している。

2016年は芸術祭開催年であるが沙弥島会場の春期は3月・4月と年度をまたぐため、2016年度の共同研究としては2016年4月の芸術祭後半と11月に行われた関連イベントが対象になる。一方紀要の公開が11月のため既に芸術祭の内容については2016年紀要[註]で取り上げ、また出版助成による記録集を製作し公開している。したがって今回の2017年紀要は2016年秋期イベントを中心に研究成果を報告したい。

2. 研究の目的

近年、この瀬戸内国際芸術祭を含め地方を開催地としたアートイベントが盛んであるが、これは旧来のインフラ・施設整備型の地域再生とは異なったアプローチが求められている証左であろう。そこでは単に集客により地域経済が潤うということだけではなく、イベントを企画・実行することにより生まれる地域住民の連携や来訪者とのコミュニケーションといった人と人とのつながり、コミュニティの形成ということも大きな目的だと考えられる。「沙弥島アートプロジェクト」でも当初より地域との連携と、そのために地域の固有性を作品テーマに取り入れることを意図してきた。この点では「沙弥島アートプロジェクト」としては一定の成果が得られたと考えている。とはいえ、これまでの活動はどうしても本学の教員(アーティスト)が主体となり、地域の方の参加を募る形が主であった。しかしながら、本質的な地域コミュニティの確立には、地域の方が自発的なイニシアティブをとって活動することが不可欠である。そこで今回の研究プロジェクトでは、これまでに地域から芽生えたアートへの関心を検証し、将来のプロジェクト・コラボレーターを輩出することを見据えた継続的なワークショップの方法論を探究することを大きな目標とした。

3. アートイベントに関わる人々:コラボレーター

「沙弥島アートプロジェクト」を核とする活動に参加する者は、次のように分類できる。①作者、②ワークショップ参加者、③一般ボランティア、④本学学生スタッフ、⑤芸術祭事務局スタッフ、⑥市役所スタッフ、⑦地域の作家や研究者、⑧来訪者。このうち作品制作に関わるのは①から⑤の者、会場運営に関わるのは①と③⑤⑥の者といえる。この中で今回の研究テーマに対応する②③⑥⑦の地域住民とアートイベントの関わりについて考えてみたい。

②ワークショップ参加者

我々のプロジェクトに限らず、他会場あるいは一般の美術館さらに博物館のワークショップでも小中学生を対象としたものが多い。考えられる要因としては学生は比較的時間に余裕があること、また現在学校でも美術を学んでいるということもあろう。実際「沙弥島アートプロジェクト」でも小中学生のワークショップを何度も行ったが、その性

質は実際の作品制作そのものに参画するものと参加者個々の小品を制作するものに大別される。特に芸術祭作品自体に参加することは特別な経験であり、また現代美術の既成概念にこだわらない方法論を体験することは、将来的な美術への関心の基盤となると確信できるので、時間はかかるが地域のアートパワーに貢献するものである。また副次的効果としては、たいていの場合子供達は保護者と同伴するので、保護者の世代へも少なからぬ影響を与えていると考えられる。実際にそこから「坂出親子おてつ隊」が活性化され様々なプロジェクトに関係するようになった。

図 1「LAS ISLAS しま・しま」制作ワークショップ

次に子供達と同等に参加者が多いのが、仕事や子育ての一線を退いた中高年の方である。これらの方には作品制作のみならず会場運営でも大いに助けていただいた。

図 2「ハレの日、金時への道」制作ワークショップ

③一般ボランティア

前項最後に触れた地域ボランティアの方であるが、瀬戸内国際芸術祭では「こえび隊」と称している。これは同じ北川ディレクターが先に始めた「大地の芸術祭・越後妻有アートトリエンナーレ」の「こへび隊」をもじったものである。研究メンバー：藤山は両方のトリエンナーレに出品したが、新潟のこへび隊は大学生が主力であったのに対し、香川のこえび隊は先に述べたように中高年の方が多かった。新潟に学生が多いのは美術系大学の多い東京からの参加が考えられるが、それに対してこえび隊は地域住民が多いのが特徴である。大学生は卒業したら疎遠になりがちだが、地域住民は継続的な活動が可能である。実際我々の会場をサポートしてくれた方々も前回からの参加者や複数の作家の作品に携わっている人が多かった。

さらに 2016 年に実現したサポートワークとして、地域の現役会社員の方に作品制作に取組んでもらうことができた。これは会場に近接する YKK AP 株式会社に協力していただいたのだが、働くお父さんという、これまで現代アートと接点の持ちにくかったであろう層にアプローチすることができたのは収穫であった。

図 3　制作中の YKK AP 職員

⑥市役所スタッフ

1 回目の参加時から市長を筆頭に市の職員とは良好な関係が続いている。もちろん主会場の旧沙弥小中学校を含め市の管理地を使用することが端緒であったが、芸術祭本開催以外では市の立案によるイベントが増えてきた。特に 2016 年秋期に行われた「Memory of Shamijima～To See the Next～」展は市の実行委員会が主体となり、春期会場の記録をモチーフとしたオリジナルな展示を行った。

⑦地域の作家や研究者

瀬戸内国際芸術祭としてオーソライズされたものではないが、会期に並行して地域の作家有志が「坂出アートプロジェクト」を開催するようになった。こちらは沙弥島を離れ坂出中心市街地に場所を選び、2016 年度は建築家・大高正人設計の「坂出人工土地」と廃病院「旧藤田外科」を会場としていた。また人工土地は建築計画的に興味深い対象でもあるので、香川大学の建築計画系の研究室も関係していた。現在のところ我々研究グループとしてはオフィ

シャルな関係は構築されていないが、研究メンバー個人単位でのつながりが生まれてきている段階である。

4. 「Memory of Shamijima」フラッグを作ろう！
(2016年秋期展ワークショップ)

冒頭の研究の背景でも述べたが2016年11月4日、5日、芸術祭全体の会期終了に合わせて「Memory of Shamijima～To See the Next～」と題して春期展を振り返るイベントが開催された。主会場である旧沙弥小中学校では本学研究グループは春期展の映像資料の展示と、研究メンバー：中山の「LAS ISLAS・しま・しま」の原画展示を行った。またこれに先立ち中山は、10月8日、9日に「フラッグを作ろう！」ワークショップを実施、その成果を会場屋外の校庭に展示した。

図4「Memory of Shamijima～To See the Next～」室内展示

図5「フラッグを作ろう！」ワークショップ

「フラッグを作ろう！」ワークショップは、春期芸術祭沙弥島会場での思い出や印象的な作品、景色などの記憶をカラフルな三角旗に描いてもらい、それを連続旗に仕立てるという内容である。参加者は先着20名に限定させていただいたが、春の「LAS ISLAS・しま・しま」からのリピーターも多数参加していただき関係性を強めることができた。この秋期展は芸術祭の公式行事ではなく坂出市の独自開催という位置づけであるため、来訪者は基本的に地域の住民であるが、その分制約も少なく、前項⑦に述べた「坂出アートプロジェクト」もこの機会に開催されたものであり、アートイベントの地域定着に貢献することができたと考えている。

図6「Memory of Shamijima」フラッグを作ろう！屋外展示

5. 沙弥島アートプロジェクトの今後に向けて

今回の研究ではアートプロジェクトの制作を通じて築かれた地域コミュニティとの協調という視点から報告した。この関係性は年々強化されていることは間違いないが、それでもまだ十分とは考えていないので、最後に今後の課題についても触れたい。まずはアートイベントの定常化である。これまでに芸術祭・沙弥島アートプロジェクトの開催期間中は密度のあるイベントを実行できて来たと思うが、それ以外の期間にも会場である旧沙弥小中学校を活用できないかと考えている。もう一つは我々大学サイドの問題だが、本学学生・卒業生の芸術祭参加という点では期待していたほどの成果に届いていないと感じている。より関心を喚起し、まずはとにかく現地に行ってみることのできる方法をサポートできないか、模索していきたい。

註)これまでの活動は以下を参照のこと

戸矢崎満雄・藤山哲朗・かわいひろゆき・しりあがり寿・さくまはな・中山玲佳・市野元和、「アートプロジェクトによる地域密着型の教育実践とその効果」、『神戸芸術工科大学紀要「芸術工学2016」』、2016年参照。

「瀬戸内国際芸術祭2013-沙弥島アートプロジェクト-by-神戸芸術工科大学」Fecebookページ、2017年10月7日最終アクセス